

東京帝國大學經濟學部內 東亞經濟研究所

年四回（三月、五月、七月、九月）發行

東亞經濟叢論

第參卷 第一號

昭和十八年二月

イギリスの支那進出と重商主義……………經濟學博士 高垣寅次郎

唐代民間に於ける度量器使用習慣の
實情と布帛測定尺の一實例……………文學博士 那波利貞

東印度外國商業の特質……………經濟學博士 目崎憲司

唐代の貨幣思想……………經濟學士 穗積文雄

中國紡績事業の性格と
日華經營の對立……………經濟學士 西藤雅夫

支那製絲業の生産形態……………經濟學士 堀江英一

支那紡績勞働力の質的吟味……………經濟學士 岡部利良

（禁轉載）

書肆 有斐閣 發賣

支那製絲業の生産形態 (二)

堀 江 英 一

三 器械製絲業における「民族資本」

支那における器械製絲業は、わが國とほぼ同時期に移植をはじめながら、わが國における器械製絲業の制覇のなしとげられた明治二七年(光緒二〇年)の翌年たる光緒二二年やうやく發展の軌道に乗つたこと、支那における器械製絲業はいまなほ養蠶農家の副業的練絲を制壓してゐないこと、がさきに指摘された。このことは、支那における器械製絲業がその出發點においてすでに日本製絲業と支那における在來の生産形態との二方面から攻撃されてゐたことを意味する。支那における器械製絲業がその出發早々の光緒二二年(明治二九年)すでに畸形的發展の緒を表したのは當然である。然し支那における器械製絲業の發展の停滞と發展の畸形とは、かゝる外部からの攻撃に基づくばかりでなく、器械製絲業そのものに纏絡する性格に基づく。器械製絲業の性格がこゝでの主題となる。

I 「民族資本」の前期性

支那における器械製絲業は、マヂヤールによつて「本質的には……純民族工業(資本)の殆んど唯一のもの」と規

支那製絲業の生産形態

第三卷 一四三 第一號 一四三

27) マヂヤール著井上照丸譯、支那農業經濟論、431頁。

定された。然し支那における器械製絲業に機能する「民族資本」は三重の階層において前期資本と癒着してゐる。

〔I〕 固定資本の性格—租廠

支那とくに上海・無錫・廣東の器械製絲業では、通例工場・設備の所有者とその經營者は分離され、經營者は工場・設備を賃借する。従つて經營者は固定資本を要せず、流動資本のみをもつて足る。かくして、支那における器械製絲業では、生産資本そのものうちに租廠なる明確なる形態をもつて前期資本が持ち込まれてゐる。租廠なる形態をとつた、前期資本の器械製絲業への侵入は、器械製絲業のやうやく發展の軌道に乗つた光緒三十二年（明治二十九年）すではじまつてをり、それが支那における器械製絲業の進るべき本來的な形態であることを示した。

上海では、かかる租廠營業の絲廠中にしめる割合は九〇％に達すると報告され、無錫では約半數とも云はれ、また七〇・四％に達するとも報告され、³⁰⁾ 廣東では資料は稍古きに失するが、「概して製絲家は資本薄弱にして、工場を賃借して營業をなすものが多い」と報告されてゐる。³¹⁾ かくして、租廠營業は支那における器械製絲業の一般的形式である。

絲廠經營者は數ヶ月・一ケ年・數ケ年と契約期間を定めて絲廠を賃借し、絲廠所有者に賃借料たる租息を支拂へば足りる。従つて工場・設備などの固定資本は絲廠經營にとつて、云はゞ流動資本化することとなる。民國一八—二〇年（昭和四—五年）上海における租息は一釜當り一ケ年二八・八〇—四〇兩であり、絲廠經營者はそのほかに一釜當り九〇—一二〇兩の流動資本を要した。³²⁾

28) 蠶絲業組合中央會編；237頁。

29) 楊太金編；前掲書，114頁。

30) 大坂市役所商工課；支那の蠶絲業と生絲貿易（大正13年），138頁。

31) 大坂市役所商工課；支那の蠶絲業と生絲貿易（大正13年），138頁。

32) D. K. Lieu; Silk Industry of China (1940), P. 101.

租廠なる形態による前期資本の生産資本への導入と、それに伴ふ固定資本の流動資本化は、本来産業資本たる器械製絲業を商業資本・投機資本化する可能性を興へ、また絲廠經營者における技術改良の企圖を喪失せしめる。支那における器械製絲業の發展は、まづこの點から著しく制限される。

[II] 流動資本の性格

上海絲廠の平均釜數は二五〇釜前後である。そこで、上述の如く、一釜一ケ年の租銀二八・八〇—四〇兩、その他に一釜あたり九〇—一二〇兩を要するとすれば、二五〇釜の絲廠は略々三〇、〇〇〇—四〇、〇〇〇兩の資本を要する。然るに、民國一八年（昭和四年）調査絲廠總數九八のうち三〇、〇〇〇兩未満のものが六四・三%、民國一九年調査絲廠總數一〇〇のうち八九%。民國二〇年調査絲廠一一のうち五四・五%をしめ、³³⁾ 大半の絲廠が自己資本のほかに借入資本をもつてゐることを想見せしめる。

A 自己資本の性格—合夥 支那とくに上海・無錫・廣東では、器械製絲業における自己資本は一般に合夥組織によつて調達される。民國一九年（昭和五年）上海における絲廠一〇七から企業形態不明なる二一絲廠を除いた八六絲廠のうち、公司組織四・合夥組織七七・獨資組織五であり、合夥組織が九〇%をしめ、³⁴⁾ また民國二一年（昭和七年）製絲業資本總額二、八二一、一八八元が無錫で投下されてゐたが、そのすべては合資組織すなはち合夥組織の項目に記載され、³⁵⁾ 廣東では「個人經營は甚だ稀で、多くは數名の出資者からなる支那流の合資組織によつてゐる」³⁶⁾と報告されてゐる。かくして、器械製絲業における自己資本は多くの場合、合夥組織によつて調達される。

33) D. K. Lieu; *ibid.*, P. 98.

34) 經濟研究, 前掲號, 112—118頁より算出。

35) 顧毓方; 前掲書, 7頁。

36) 蠶絲業組合中央會編; 前掲書, 990頁。

合夥組織は二人以上の當事者が互に契約を結んで共同出資を爲し、以て共同事業の目的を達する合體であり、わが國の組合に該當する。股東の責任については、現行民法は連帶無限責任の建前をとつてゐるが、慣習法としては地方によつて異り、上海に行はれる慣習は絶対的按股分擔責任、すなはち股東は合夥の債務につき各自の股份（持分）に比例して責任を分擔し、比例以外の責任に對しては絶対にこれを分擔しないと云ふ建前が行はれてゐる。ところで合夥の股份は公司の場合と同じく紅利のほか官利を伴ふ。³⁷⁾劉大金氏はこの合夥を「組合が銀行債務に對し支拂はねばならない率より低く、銀行から得る率よりも高い利子率で、事業家の友人知己がその餘剩資金を組合に預金することは、支那で廣く行はれる習慣である」と説明してゐるやうに、合夥組織によつて調達された自己資本は、確定利付債務の性質をもち、しかも官利すなはち利子は舊式銀行からの債務利子に匹敵する。かくして、自己資本それ自體のうちに前期資本の性格がひそむ。

器械製絲業における自己資本のもつかる前期性は、それが諸多の典型的な前期資本と全き癒着關係にあることによつて證明される。

(a) 上海では買辦・絲號（賣込問屋）・絲廠は資本的に全く融合して、洋行の資本系統を作つてゐる。民國一五——一六年（昭和元——二年）前後において、絲廠の經理にして洋行筋の買辦および絲號をかねる者を列擧すれば、つぎのやうに多數に達してをり、³⁸⁾三者の密接な癒着關係の存在を立證してゐる。

吳 登 灝	安利洋行買辦・恒生泰絲號經營	瑞綿絲廠（六一〇釜）經營。
史 和 聲	怡和洋行買辦	怡和絲廠（五四〇釜）の經營を擔當。
朱 靜 庵	怡和洋行買辦	元豐（二四四釜）同豐永（二六四釜）新豐（二四〇釜）の絲廠經營。

37) 滿鐵經濟調查會；合夥股東の責任に關する一研究（昭和11年），4—5・12頁以下參照。

38) D. K. Lieu; *ibid.*, P. 99.

39) 蠶絲業組合中央會編；前掲書，325—329頁および431頁。但し個所によ

丁	汝	霖	慎余洋行 有余洋行買辦	九余(四〇四釜)第二廠(三三六釜)第三廠(四六四釜)の絲廠經營。
邱	敏	庭	公安洋行買辦・有力ブローカー	天來三工場五八八釜經營。泰來二六〇釜大來(二二〇釜)絲廠參劃。
吳	松	岩	安旗洋行買辦	大綸絲廠(二〇〇釜)經營。永豐絲廠(二三四釜)參劃。
倪	欽	章	泰和洋行買辦	統益絲廠(三五〇釜)經營。
黃	吉	文	美鷹洋行買辦・泰豐絲號經營	豫豐絲廠(一八六釜)經營。安豫絲廠(一七六釜)參劃。
夏	春	樵	連納洋行買辦	連益絲廠(二二四釜)經營。
薛	浩	峰	信學洋行買辦・緒豐絲號經營	緒昌永・緒昌福・司福三絲廠(六二四釜)參照。
陸	潤	藻	達昌洋行買辦・陸潤記絲號經營	錦昶廠その他參劃。

(b) 廣東では資料は稍古きに失するが、「廣東に於ける生絲問屋及仲買人は地方製絲工場の合資者、即ち、資本家の一人なるもの多く大勢力あり」と報告され、器械製絲業における自己資本が問屋資本と應着してゐることを示してゐる。(c) 四川省や山東省の器械製絲業も同じく問屋資本または錢莊資本と密接に結びついてゐる。

かゝる前期資本との應着は、前期資本が部分的ながら産業資本に轉化しつつあるのを示すものであるが、同時に器械製絲業における「民族資本」が未だその前期性と買辦性を克服してゐないことをより多く示すものである。

ところで、器械製絲業における自己資本が合夥組織によつて調達されつゝも、それに對して土着銀行の貸付利率に比敵する確定利率を支拂はねばならないと云ふ事實は、經營當事者たる經理の經營方法を規定する。支那の絲廠はかりに十ヶ月操業するとすれば、そのうち四ヶ月分ぐらひの原料繭を産地買付し、残りの六ヶ月分の原料繭は乾繭で購入するのが通例であるが、まへの四ヶ月分の原料繭は新絲出廻前に先物賣した生絲とリンクされて居り、その後の乾繭購入はその時々々の絲價にリンクされてゐるのであり、従つて絲價と乾繭價格の鈎合如何に

40) さきの記述に従ふ。異なるときは、さきの記述に相異あるときは、さきの記述に従ふ。大阪市役所商工課；前掲書、160頁。

よつて繰繰の閉閉が決定され、操業は不確實なのを通例とする。また繰繰の先高豫想の場合には合夥を組織し、逆の場合には直ちに解散すると云ふ如く、企業自體の永續性も存在しない。かゝる操業の不確實・企業永續性の欠如は、租廠制度による固定資本の流動資本化によつて可能にされ、促進されてゐるとは云へ、より多く前掲の自己資本の性格に規定されてゐるのであるが、それが器械製絲業の發展を著しく阻害してゐること云ふを俟たない。

B 借入資本の性格―購繭資金の調達 器械製絲業における流動資本の大部分は購繭資金によつて占められてゐる。それは第一に生絲價格に對する繭本（わが掛目に該目する）が民國二〇年（昭和六年）上海では九〇%、ある繭廠では一〇〇%以上に達し、原料繭價格が生産費に對してしめる割合が極度に高い事實に基き、第二に廣東の如く年七回の收購が可能の場合を別とすれば、現在の支那では夏秋蠶が普及しつゝあるとは云へ、未だ春繭が支配的であるから、繭廠は春繭收穫季に一時に購繭資金を必要とし、これを少くとも四ヶ月（繭廠の産地買付部分は前掲の如く四ヶ月分の原料繭に該當する）固定せねばならない事實に基く。かくして、購繭資金は器械製絲業における流動資本の主要部分をしめる。

上海では、購繭資金は相關聯する二過程によつて調達される。第一過程。繭廠は原料繭の産地買付に先立つて錢莊、ときには新式銀行から三ヶ月期限の信用を獲得するが、その場合繭廠は錢莊、ときには新式銀行に對し墊頭（保證金）として信用額の略々三〇%を提出せねばならない。従つて前述の自己資本は本質的には購繭資金調達のための墊頭としての役目をもつにすぎない。繭廠が産繭地域の繭行で買付けた原料繭の代價は、錢莊ときには新式銀行が繭行に派遣した出張員の手によつて支拂はれ、購入した繭は錢莊ときには新式銀行の指定繭棧または

兼營繭棧（繭倉庫）に入庫され、棧單（倉庫證券）は錢莊ときには新式銀行が受取る。絲廠は債務を漸次辨済して漸次出庫して、原料繭にあてる。第二過程。絲廠は自己資本の大部分を錢莊ときには新式銀行から獲得する購繭信用の墊頭としてゐる以上、租息・燃料費・俸給賃銀とくに原料繭出庫のために錢莊ときに新式銀行に支拂はねばならない資金を新しく調達せねばならない。この資金の調達は、錢莊・新式銀行・絲號（生絲賣込問屋）に既に生産された生絲そのもの或はその棧單を擔保に供することによつて得られ、生絲が洋行に引渡されてその代價が未だ支拂はれてゐない場合には、専ら絲號から得られるが、通例絲價の七〇—八〇%の信用があたへられる。これらの場合、錢莊の貸付利子は月〇・六—一・二%、絲號の貸付利子はこれより月〇・五五%たかひのが通例である。従つてかゝる短期資金にかゝらず年利七—一四・四%の高利になる。⁴²⁾かくして、器械製絲業における自己資本はかゝる高利の購繭資金を獲得するための保證金の機能を果すにすぎないこと、明瞭である。

廣東では年七回の收繭が行はれて居り、従つて、購繭資金の問題は上海絲廠にとつてよりも多少重要性を減ずる。廣東における購繭資金の調達は上海と異り、生絲問屋たる絲庄を通じて行はれる。即ち「銀號の製絲資金は直接製絲家に融通するもの殆どなく、孰れも問屋の手を経て行はれてゐる」⁴³⁾この金融方法が絲庄の絲廠支配を前提するものであり、それを強化するものであること、明瞭である。

〔Ⅲ〕 總 括

前掲の諸事實の分析は、器械製絲業に機能しつゝある「民族資本」そのものに内在する前期性を明確に示してゐる。「民族資本」のかゝる前期性はずきの二事實となつて集中的に表現される。

42) D. K. Lieu; *ibid.*, P. 101—102.

43) 蠶絲業組合中央會編; 985—986頁。

第一に、前期資本のもつ前期性は、産業資本の創造した利潤をうばひ去つて、産業資本に對し利潤の餘地を残さず、従つて産業資本の生成と發展を決定的に阻害するところにある。器械製絲業における「民族資本」に内在する前期性は、かくして器械製絲業の生成と發展を決定的に阻害してゐる。所謂野鷄絲廠の俗稱に見られるやうな絲廠經營者（合夥）の離合集散は、全く器械製絲業における「民族資本」の前期性に基く現象であり、絲價がなほ上昇傾向にあつた民國一五—一六年（昭和元—二年）においてさへ、上海では絲廠經營者の離合集散が毎年絲廠數の一〇—二〇%にのぼつた。⁴⁴⁾

第二に、器械製絲業における「民族資本」は、買辦資本・問屋資本・錢莊資本と全く癒着してゐることから、二つの結果が生ずる。一方に、「民族資本」は買辦資本・問屋資本・錢莊資本などの流通資本の支配を克服して自らのための價值實現機關たらしめるところか、逆にこれに隸屬して居り、従つて「民族資本」は産業資本の自主性を全く喪失せざるを得ない。他方に、「民族資本」はかゝる流通資本への隸屬化を通じて外國資本につながり、従つて器械製絲業に機能する資本が専ら「民族資本」であつても、それは未だ買辦性を止揚し得ない。

支那における器械製絲業は世界恐慌に至るまで發展傾向を示してきたが、それは支那における産業資本の健實な發展を指示するものでなく、前期資本が絲價の上昇傾向にともなつて一時的に動員されたに過ぎないと見做しうる。

II 「民族資本」の變質？

器械製絲業における「民族資本」のかゝる性格は、世界恐慌の影響を激化した。生絲輸出の最盛年たる民國一

44) 蠶絲業組合中央會編；前掲書、322-990頁。The Silk Industry in Kwangtung Province (ibid.), P. 608.

八年（昭和四年）に一二三、〇〇〇擔であつた蠶絲輸出數量は、民國二八年（昭和十三年）には三二、七〇〇擔へと四分の一に激減し（表I）、民國一九年（昭和五年）に江浙兩省に一八一あつた絲廠が民國二三年（昭和九年）にはほぼ三分の一たる六二にまで減少した（表II）。然しかゝる恐慌の慘禍のうちから、唯々一つにすぎないが、かなり新しい外貌をそなへた「民族資本」が生れた。無錫の薛壽宜がこれである。

薛壽宜は世界恐慌以前に既に無錫で永泰絲廠（叔父薛潤培の名義）・錦記絲廠を所有・經營し、永泰絲廠蠶種製造場を經營し、⁴⁶⁾ 無錫地方に十餘軒の繭行を所有してゐた。⁴⁷⁾ そして永泰絲廠資本六〇、〇〇〇兩資産八二八、〇〇〇兩錦記絲廠資本五〇、〇〇〇兩資産二二〇、〇〇〇兩と稱され、⁴⁸⁾ また永泰絲廠蠶種製造場について「自有桑園もつとも多きものは……永泰第一場にして六〇〇畝を有す」と報告されてゐるやうに、支那最大の製絲業者であつた。ところで、世界恐慌の進展に伴ひ、絲廠經營者にして破産する者多く絲廠の借り手のないのに乗じて、薛壽宜は民國二二年（昭和七年）以來漸くその支配力を増大した。(a) 支那事變直前に彼の經營した絲廠は、自廠經營六租廠經營一二計一八に達し、⁴⁹⁾ 無錫に經營される絲廠の大半が、彼の經營に屬するばかりでなく、彼は從來のやうな操業の不確實を克服して、持續的な操業を繼續した。(b) かくて、彼は持續的な操業を繼續するために、原料繭は専ら産地で直接買付する方針をとり、支那事變直前に彼の所有する繭行一五・租行（繭行を借り自ら鮮繭買付にあたる形態）八七合計一〇二の多きに達し、乾繭買付に殆んど依存しなかつた。とくに彼は養蠶合作社を組織して、これに自己の蠶種製造場で製造した改良種を配布し多數の指導員を派し、かくて製造された優良繭を特約的に買入れ、彼の指導員講習學校では三〇〇人以上の少女が訓練されてゐたと報告されてゐる。⁵⁰⁾ (c) さらに、彼は

支那製絲業の生産形態

第三卷 一五一 第一號 一五一

45) 48) 楊文金編；前掲書、133-144頁。

46) 49) 國際貿易局編；中國實業誌江蘇省（民國22年），164・167頁以下。

47) 蠶絲業組合中央會編；前掲書、326頁。

50) Agrarian China [1938], p. 184 ff & 234 ff.

「從來生絲ハ、製絲工場カラ絲號ノ手ヲ通シテ貿易港ノ洋行ニ賣ラレルト謂フノガ習慣デアツタカラ製棧工場ハ多カレ少カレ、絲號及洋行ノ支配ヲ受ケテ來タ譯デアル。壽宜ハ斯ウシタ販賣方法ニ一大改革ヲ試ミ、アメリカニ販賣員ヲ常駐セシメテ直接販賣スルト謂フ方法ヲ採ツタノデアル」⁵¹⁾と報告されてゐる。かくして、薛壽宜は部分的ながら、近代の産業資本家としての外貌と經營方法を具現してゐる。たゞこの場合、薛壽宜の經營が獨資組織であり、自廠經營・自有銀行に經營の基礎を置いてゐることであり、このことは「民族資本」の前期性についての前掲分析と對比して注意されるべきである。

* 京都帝國大學經濟學部學生胡逸名君が事變前永泰絲廠に勤めてゐた王氏について聴取したところによると、自廠經營は永泰・華新・隆昌・錦記・永盛・鎮綸の六絲廠であり、租廠經營は振藝・泰孚・永裕・民豐・鼎昌・寶豐・新盛・裕盛・永昌・三新・振元・泰昌の一二絲廠であるが、寶豐・新盛・三新・泰昌は王氏が絲廠名の思ひ違ひをしたらしく、かゝる絲廠名は他の資料中に存在しない。また別の調査によれば、薛壽宜の經營した絲廠は、永泰・華新・永盛・裕生・振藝・振元・鼎昌・鼎盛・福綸・永裕・森明・宏餘・泰孚・天豐・嘉泰・潤康・大生その他一つの一八絲廠と云はれてゐる。

** 前掲脚註に示した苦農・錢兆熊兩氏はこの特約組合が廣く利用されたと述べてゐるが、小野忍氏は、この特約組合が多條織絲器をそなへた華新絲廠の原料商購入のため利用されたとすぎないと報告してゐられる。⁵²⁾今後の研究に俟たねばならない。

薛壽宜の經營に見られる如き新しい「民族資本」が支那における器械製絲業の新しい動向であつたかどうか、支那事變の勃發によつてわれ／＼はこれを見ることができなかつた。然し器械製絲業における「民族資本」を支那の「民族資本」の一環として考へるとき、次の二事實を斷言しうる。第一に、人絹工業の發展以來生絲の世界需要は停滯して不變の状態を維持し、生絲價格の上限はほゞ人絹價格の三・五倍を越え得ない事情のもとにおいて、支那における前掲の如き新しい「民族資本」が發展をとげるためには、わが國の製絲業からその市場を奪取

51) 滿鐵上海事務所調査室；無錫製絲業(昭和16年)，10頁。

52) 滿鐵上海事務所調査室；前掲書，8—9頁。

すると云ふ困難をなしとげねばならないが、たとへこの困難がなしとげられて新しい「民族資本」が發展したにしても、製絲業がわが資本主義の確立に對してなしたやうな役割を今から果すことはできない。製絲業は世界經濟の現段階では云はゞ果すべき役割を終つてゐる。第二に、器械製絲業における新しい「民族資本」がたとへ發展しても、總「民族資本」の確立が前提されない限り、器械製絲業における新しい「民族資本」の確立を期することができないであらう。然るに、支那專變以前の現實は「民族資本」の問題のはなばなしさにかゝらず、生産手段生産部門は發展するどころか、逆に英米資本主義によつて「民族資本」の手から奪ひ去られ⁵³⁾、かくして支那の「民族資本」は英米資本主義の土臺のうへに立ち、それなくしては存在し得ない性格を担されてゐた。かくして、支那の「民族資本」の所謂自主性はわが國から見た偏見にすぎない。器械製絲業における新しい「民族資本」の確立が、かゝる條件のもとで期し得られたかどうか、疑問なきを得ない。

四 器械製絲業と小營業との對抗

器械製絲業と養蠶農家の副業的繰絲とが、支那における製絲業で本質的に對抗する生産形態であることを論證したが、それと關聯せしめつゝ、器械製絲業に機能する「民族資本」の前期性と養蠶農家の副業的繰絲における家族労働の低廉性とをすでに示唆した。そこで、器械製絲業と養蠶農家の副業的繰絲との對抗關係の基礎、換言すれば器械製絲業が養蠶農家の副業的繰絲を容易に驅逐し得ない理由を立ち入つて検討しようとする今の場合、まへに示唆した二つの事實のより詳細な検討を當面の主題としなければならぬ。

53) 有澤廣己編；支那工業論（原著 Industrial Capital in China. 1936）418頁で、方顯庭が引用するイギリス極東經濟使節の報告を參照。

I 器械と低勞銀との對抗

器械と「低勞銀」(こく)では嚴密には低廉な家族勞働と云ふべきであるが、簡單を期するため「低勞銀」と云ふ)との對抗と云ふ一般的命題は、製絲業では特別に重要な意味をもつてゐる。

製絲業における基礎技術が作業機たる繰絲器であること云ふまでもないが、すでに述べたやうに、器械製絲業は工場用座繰器を備へ、養蠶農家の副業的繰絲は足踏座繰器を備へてゐる。ところで、工場用座繰器と足踏座繰器との相異は、前者が一本の傳導軸から動力をうけ途湯管から繰絲湯を供給されるに反し、後者が足から動力をうけ個々の焜爐によつて繰絲湯を暖めると云ふ相異を除けば、構造上の本質的な相異は見出されない。若し機械と道具との相異が、動力ではなく作業機の性格によつて決定されるとすれば、工場用座繰器も足踏座繰器にひとしく道具に屬すべきものであり、従つて器械製絲業は「純機械工業とは云ひ難いのである」⁵⁴⁾かゝる場合、器械製絲業がその優秀な技術をもつて養蠶農家の副業的繰絲のもつ「低勞銀」を容易に制壓し難いことが想像される。

然し明治二十七年(光緒三十三年)同じ技術條件のもとで器械製絲業の制覇を完成したわが國を念頭に置くと、器械と「低勞銀」との對抗と云ふ一般的命題はさらにより深く検討されねばならない。

II 補強された一般的命題

江蘇省吳江縣開弦弓の協同組合工場たる開弦弓絲廠の歩んだ道は、當面の主題の解決のための好個の事例となる。

開弦弓では、農家一戸當り平均八・五畝の土地を耕作してゐるが、彼等はそこから平均五一ブツセルの米を生

54) 井上柳梧；絹絲學(昭和8年)，237頁。

産する。彼等が自作農である場合には、自家消費米四二ブッセルを除いた残餘の九ブッセルの價格二二元の現金をうることができる。彼等が小作農である場合には、現物小作料二〇ブッセルを除いた三一ブッセルは、自家消費米にも足らず、しかもこの小作農が農民の大部分をしめてゐる。ところで、農家一戸當りの年平均現金支出は經常費だけでも最低二〇〇元を必要とするから、副業が是非必要となり、かゝる現金支出を補ふべき副業が養蠶業と副業的繰繰である。世界恐慌以前には、土絲生産による剩餘は一戸當り平均二五〇元に達し、現金支出を賄ふに充分であつた。⁵⁵⁾かくして、開弦弓では、米作は自家消費と現物小作料との供給源であり、土絲生産が現金収入の殆んど唯一の源泉であつた。

ところが、世界恐慌に伴ふ絲價暴落の結果、以前二五〇元の剩餘を産み出した土絲生産が民國二四年（昭和一年）には四五元に減少し、農家の收支は全く破れた。⁵⁶⁾そこで、開弦弓では、はじめ養蠶農家の副業的繰繰なる生産形態を維持しつゝ土絲の品質向上によつて窮狀を救はうとし、改良足踏座繰器を導入したが、かくして改良された土絲も輸出に適せず、窮狀を打解することができなかつた。かくて遂に養蠶農家の副業的繰繰を全廢して協業組合工場を設立し、その産繭を協業組合工場に供給し、産繭代價と協同組合工場の配當金との和からなる現金収入によつて收支の均衡を回復しようとし、民國一八年（昭和四年）開弦弓絲廠を設立し、民國二四年（昭和一年）には日本式多條繰絲器を設備した。⁵⁷⁾

開弦弓絲廠はつぎのやうな内容をもつてゐた。⁵⁸⁾(a) 企業形態は有限股份公司であるが、股東四二九名はこの村落世帯全部と隣村の五〇餘名を含み、股東は出資義務のほか原料繭の供給義務をもつてゐた。従つて、開弦弓絲

55) 費孝通著仙波嶺谷譯；支那の農民生活（原著 Peasant Life of China, A Field Study of Country Life in the Yangtze Valley. 1939）, 240—241頁。

56) 費孝通；前掲書, 241—242頁。

廠は、わが國の組合製絲に相當するものであり、股東の供繭義務のうち養蠶農家の副業的繰絲から器械製絲業への再編成の自主的意圖がうかがわれる。(b) 開弦弓絲廠の資本は一〇、〇〇〇元であり、一〇元宛の一〇〇〇口の股份に分割されてゐたが、民國二六年(昭和十二年)には總額の半分も拂込まれてゐなかつた。従つてこの絲廠は殆んど借入資本に依存せざるを得なかつた。價格四、〇〇〇元に相當する蒸氣機關および舊式器械は省立女子蠶絲學校から五ヶ年賦返済の契約で借り、工場は省立農民銀行からの一五、〇〇〇元の長期借入金によつて建設され、流動資金三、〇〇〇元は近くの震澤の地方銀行から借入れられ、また購繭資金は購繭を擔保として省立農民銀行から借入れられ、農民は供出繭價格の七〇% (これが購繭を擔保とする銀行の貸付限度である) の即時支拂をうけ残餘は延拂である。かくして、開弦弓絲廠は協同組合工場である點で一般絲廠と異り、また、借入資本や自己資本が前期資本か否か疑問の餘地を残すが、その資本が殆んど利付資本である借入資本に依存してゐる點では、一般絲廠を代表しうる。

かゝる内容をもつて出發した開弦弓絲廠は、その途上で二つの障害に遭遇せねばならなかつた。そしてその障害こそ、器械製絲業と養蠶農家の副業的繰絲との對抗關係の基礎を説明する。(a) 資本の調達。開弦弓絲廠は資本の性格については疑問の餘地を残すにしても、それは全く借入資本に依存し、その限りにおいてそこで創出された利潤は絲廠または股東の手許からはこび出される。民國一八年(昭和四年)に純利益一〇、八〇七・九三四元あつたが、民國一九・二〇年には利益をあげたにかゝわらずそれ〱三、〇一〇・三三〇元・四、一八三・六五五元の純損失があつたのは、このためである。かくして、養蠶農家が現金收入の増大を企圖した器械製絲業は何らの

57) 費孝通; 前掲書, 257—258頁。
58) 費孝通; 前掲書, 259—262頁。

配當金をもたらさず、また供出額の代償の三〇%が延拂されることは、農民をして供出義務を怠らしめざるを得ない。⁵⁹⁾ (b)「抵勞銀」。この村落では開弦弓絲廠開設以前には殆んど三五〇人の婦女子が土絲生産に従事してゐたが、開弦弓絲廠は今や、この仕事を七〇人以下でなしとげることができ、殆んど三〇〇人の婦女子が土絲生産から追放される。ところが、耕地面積はこの「失業」人口を容れる餘地がない以上、そしてまた土絲生産に匹敵する新しい副業が導入されない以上、これらの「失業」人口は僅かでも収入が得られれば土絲生産に従事しようとする。この場合家族労働の下限は極言すれば零よりも無限小だけ大きいところまで下落しうるわけである。かくして前掲の事情と結合しつゝ、新しく養蠶農家の副業的線絲が復活する。民國一八年（昭和四年）農民は産繭の六分の一を土絲原料繭として留保したが、民國二十二年（昭和七年）にはその割合は三分の二に増大した。⁶⁰⁾ かくして、開弦弓絲廠は協同組合工場による土絲生産の器械製絲業への再編成と云ふ新しい内容と新しい企圖を懷いて出發したが、一つにはそれが殆んど全く借入資本に依存し、ために利潤が經營者の手許から外部にはこび出されるために障害を感じ、二つには資本主義工業が殆んど全く先進資本主義諸國によつて奪れてゐるために土絲生産の器械製絲業への再編成によつて土絲生産から追放される「失業」人口の收容所をもたず、そこから極度に低廉な家族労働を基礎として土絲生産が復活すると云ふ障害に遭遇した。

五 結 言

支那製絲業の生産形態を、器械製絲業と養蠶農家の副業的線絲との未だ克服されてゐない對抗關係をモテイフ

支那製絲業の生産形態

第三卷 一五七 第一號 一五七

59) 費孝通；前掲書，265—266頁。

60) 費孝通；前掲書，272—273頁。

としつゝ、分析してきた。そして支那製絲業におけるかゝる執拗な對抗關係の基礎、換言すれば器械製絲業の小營業に對する相對的停滯性の基礎は、つぎの二つの要因に基く。

(a) 器械製絲業に機能する「民族資本」のもつ前期性、買辦性は、一つには屢々述べたやうに、器械製絲業の創造した利潤を殆んどすべて外部にはこび出し、器械製絲業の健全な發展を破壊するばかりでなく、二つには器械製絲業における技術、生産力の發展の可能性を全く奪つてゐる。とくに租廠がこの點に強く作用する。支那における器械製絲業の技術水準は、器械製絲業移植當時から殆んど進歩せず、略々わが國の明治三〇年頃の水準にあると云はれ、民國一五—一六年（昭和元—二年）には一釜一日繰絲量はわが國の半分であつた（表IV）。この場合、技術水準の停滯性と「民族資本」の前期性との關聯が注意されねばならない。

IV

實數 長野縣平均を 一〇〇とする割合	支 那 (民國一五—一六年)							長野縣 (昭和二年)		
	上 海	廣 東	東 四	川 山	東 漢	口 平	均	營業製絲	組合製絲	平均
100.0	43.3	33.0	44.0	60.0	50.0	55.0	70.0	24.7	24.9	29.8
100.0	83.3	63.0	84.0	120.0	100.0	110.0	140.0	100.0	100.0	100.0

(備考) 一、支那は蠶絲業組合中央會編・前掲書三一頁、長野縣は大日本蠶絲會編・「蠶絲要覽」(昭和五年)二二〇—二二二

二頁所載の長野縣蠶絲課調査よりとる。

二、支那における一釜當り労働者數はわが國より遙かに多く、支那に廣く普及してゐる上海式繰絲法たる索緒・繰絲分業法では少くともわが國の一・五倍以上の労働者を要する。上海・漢口における高水準はこの上海式繰絲法によつてもたらされたのである。この點とくに注意。

三、この點を考慮に入れれば、支那における一釜一日當り繰絲量は長野縣の五〇%前後であり、上原重美氏の廣東に關する規定『宛然明治三十年前後の本邦製絲業を想起せしめる感がある』（意絲業組合中央會編前掲書九四六頁）が全支の器械製絲業に妥當する。なほこの規定は民國二〇—二一年にもあてはまる。當年における上海の一釜一ヶ月當り「生産能力」はそれ／＼平均〇・一八三〇担、〇・一八二六担である（D. K. Lieu; *ibid.*, P. 109. Table. 10）。

(b) 養蠶農家の必要とする現金支出が殆んど土絲生産によつて賄はれ、しかも土絲生産から追放された「失業」人口を收容すべき資本主義工業の成長・發展を許されない支那事變前の支那經濟機構のもとでは、養蠶農家は自家労働の極度に低い報酬を求めて土絲生産に執着する。こゝで手許の資料を公表するわけにゆかないが、支那事變後の調査によれば、土絲價格は土絲生産費を遙かに割つてゐるが、しかも尙ほ自家労働の報酬の残された僅かの部分を求めて土絲生産が強固に繼續されてゐる。韓里絲（再繰せざる土絲）價格は廠絲價格の六〇%前後、經絲（再繰土産）價格は八〇%前後を動いてゐるのであるが、しかもなほ廠絲に對抗しうるのはこれがためである。

かくして器械と「低勞銀」との補強された對抗關係、詳言すれば器械製絲業に機能する「民族資本」の前期性、買辦性に纏はれ、それによつて生産力を停滯せしめられた器械と資本主義工業の成長・發展の可能性を奪はれて土絲生産に依存せざるを得ない養蠶農家の「低勞銀」との對抗、この對抗關係こそ支那製絲業をして器械製絲業と養蠶農家の副業的繰絲との對抗關係を克服せしめざる根據であり、従つてまた宣統元年（明治四二年）land of Sores の王冠を日本に讓るに至らしめた根據である。補強された一般的命題の貫徹こそ、支那蠶絲業停滯の基底である。